

ADVANレーシングタイヤインフォメーション

2008年 SUPERGTシリーズ第8戦

2008.10.19

SUPER GT in KYUSHU 300km

横浜ゴム(株)が「ADVAN」ブランド誕生から、ちょうど30年目となる08年にチャレンジするカテゴリーのひとつがSUPER GTシリーズだ。全9戦で開催され、海外のサーキットも舞台とする国内最高峰のシリーズにおいて、ADVANはGT500クラスに出場するTOYOTA TEAM TSUCHIYA、そしてKONDO RACINGとのパートナーシップを継続。それぞれ表彰台の中央を目指す。

TOYOTA TEAM TSUCHIYAは土屋武士と石浦宏明を起用してECLIPSE ADVAN SC430を、またKONDO RACINGは、ジョアオ・パオロ・デオリベイラと荒聖治のコンビで、WOODONE ADVAN Clarion GT-Rを走らせる。

いよいよシリーズは佳境に差し掛かり、残るレースは2戦のみとなった。その第8戦の舞台は九州唯一の公認サーキット、オートポリス。阿蘇山を見渡す大自然の中に位置するサーキットは、その立地条件を生かした野趣溢れるレイアウトが、最大の特徴でもある。アップダウンが激しく、ストレート以外では絶えずハンドルを切っていなければならない。そんな典型的なテクニカルコースである上に、路面状態はお世辞にもいいとは言いがたいから、タイヤには国内で一、二を争うほど負担を強いることでも知られている。

したがって、今回用意されたタイヤに重視された要素は、耐摩耗性であるものの、だからといって硬くし過ぎると、かえって滑ってしまい、摩耗を早めてしまう。そこで対策として、接地性を高めるよう構造を改良したタイヤをツインリンクもてぎで入念にテストし、オートポリスに合わせ込むことに。また、上りの最終セクションは特にアンダーステアが出やすく、出しまえばより摩耗が進むため、最重要ポイントとして位置づけてタイヤは製作されている。

前回のもてぎラウンドでは、ECLIPSE ADVAN SC430が予選14番手から10位入賞。WOODONE ADVAN Clarion GT-Rは予選15番手から14位にひとつ順位を上げるに留まり、とても本意な結果とは言いがたかった。しかしながら、今回は2台ともウエイトハンデに苦みず済み、かつ救済を受け

られることは、こと終盤においては極めて有利な要素といえる。もちろん、ADVANはサポートに全力を尽くす所存だ。

一方、GT300クラスでは練習、予選1回目でウエッズスポーツIS350が他を圧していたものの、再車検をクリアできず。全タイムを抹消されたため、決勝には



最後尾から挑むことに。チームの名誉のために補足すると、吸気口を塞いでもエンジンが止まらなかったからなのだが、ピットに戻ってメカニックがチェックすると、同じ状態でありながら、エンジンは問題なく止まっている。走行直後でリストラクターが熱で膨張したと思われるが、再発防止のため決勝前にはエアボックスごと交換。織戸学はスタートと同時に激しく追い上げ、3番手でピットイン。その間にひとつ順位を落としたが、阿部翼もルーキーらしく大胆な攻めで前走車を抜き続け、52周目にはついにトップに！

その結果、GT史上最多となる24台抜きの大逆転で、ウエッズスポーツIS350が初優勝を飾ることとなった。



一方、予選トップだったコンケルパワータイサンボルシエは、惜しくも4位に甘んじたものの、2位にはプリヴェKENZOアセット・紫電が、そして3位にはtriple a ムルシエRG-1がつけ、ADVANユーザーたちが上位を独占。タイヤ的には、摩耗の激しいオートポリスにも対応でき、グリップとのバランスに優れることが事前のテストで確認されていることもあり、今回も活躍が期待できそうだ。

引き続きウエッズスポーツIS350は表彰台を目指すとともに、チャンピオンを狙う上で、このレースを絶対に落とせないのが、プリヴェKENZOアセット・紫電、ORC雨宮SGC-7、コンケルパワータイサンボルシエ。このあたりにダイシンADVAN Zも加え、確実に優勝争いを繰り広げてくれるはずだ。

今回のレースでGT500クラスに用意されたドライタイヤは、ソフト、ミディアムの2種類。練習や予選においてドライバーのフィードバックを重視しつつ、路面温度やタイムの出方を見て使い分けられる。今回は約1300本のADVANレーシングタイヤが準備される。



2008年 SUPERGTシリーズ第8戦用ADVANTイヤラインアップ

		GT500	GT300
ドライ用 スリック	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S, M)	2種類 (SS, S)
	サイズ	330/710R18、330/710R17	280/710R18、280/680R18、 280/650R18
ウエット用 レイン	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S, M)	2種類 (S, M)
	サイズ	330/710R18、330/710R17	280/710R18、280/680R18



優れた環境の中で、 誰にも負けない気持ちを身につけた



GT300クラスのタイトルを手土産に、今年からECLIPSE ADVAN SC430を駆り、GT500クラスを戦うこととなった石浦宏明選手。新たなADVANの使い手は、土屋武士選手とタッグを組んで、ここまで4位入賞が2回と、表彰台まであと一步と迫っています。シリーズも残すところ、あと2戦。成長をテーマに、ここまでのレースをどう戦ってきたか、石浦選手に話を聞いてみました。

—シリーズも後半戦にさしかかりましたが、開幕当初と印象が変わったことはありますか？

石浦選手「最初のテストから、あるレベルまでは達していたと思うんですが、例えば決勝のレースラップや、300（クラスの車両）の処理とか、ニュータイヤを使い切る部分に対しては、ちょっと出遅れがありました。何とか普通にレースできる状態にはなっていたんですが、序盤戦それほどポイントが獲れなかったのは、ちょっと足りないところがあったからだと思うんです」

—それを克服したのは？

石浦選手「テストです。徐々に遅れをとり返すことができたし、その後はニュータイヤを履く機会も増やしてもらったので、使い方を学べるようになりました。あとレース中、300の処理に手間取らなくなってきたのは、セパン（第3戦）からですね。ロスしちゃいけないというのを常に意識していたんですけど、セパンからは普通に抜いていけるようになりました。どこで行っていい、どこで行っちゃいけないっていうのを、頭で考えてなくても、からだで判断できるようになってきたんです。すると不思議なもので、アベレージラップも良くなってきたんです。中古タイヤでのレースラップも、一発の出し方も、トータルで全部揃って上がっていったような感じでした」

—何かひとつだけが、というのではなく、全体が上がってきているんですね。

石浦選手「そうですね。小さいことの積み重ねで、だんだん限界近くで走れるようになったと思います」

—すると今は、階段を確実に上がっているような感じですか？

石浦選手「自分の中で意識しているのは、焦ってクラッシュとかすると、上がっている最中の階段から一気に落ちたりするんで、それだけは避けなきゃいけないと思っています。だからといって、リスクを避けて極端に遅くすることはないですけど、行くところと行かないところはメリハリをつけよう。その意味では、今までクラッシュはなかったので、順調にきているんですが」

—今回のテーマは「成長」なんですけど、フォーミュラトヨタの頃から見てきた身としては、ここ1、2年の成長スピードは加速したように思えるのですが。

石浦選手「そうかもしれません。たぶん環境が大きく影響していると思うんですけど、普通のチームだと乗る時間は、セカンドドライバーだと限られるじゃないですか。それをものすごく均等か、それ

石浦宏明

25 TOYOTA TEAM TSUCHIYA
ECLIPSE ADVAN SC430

いしうら ひろあき

1981年4月23日生まれ、東京都出身

カートレースデビューは99年。新東京サーキットヤマハクラスでデビューウインを飾り、その後3年間で21戦9勝、もてぎ選手権のFAクラスではチャンピオンに。02年よりフォーミュラトヨタに参戦し、05年には2勝を挙げてランキング3位。また同年、GC-21で全勝、チャンピオンを獲得。F3には翌06年から出場し、最終戦で優勝。そして07年には2勝し、ランキングでは4位となるとともに、合わせて出場したSUPER GT300クラスでチャンピオンに。今年も土屋エンジニアリングからGT500クラスに。またフォーミュラ・ニッポンにもステップアップし、3度の入賞を果たしている。

以上に乗せてもらって。今年も成長を考えてタイヤテストでは、ニュータイヤを普通はまだ履かせないような時期でも経験を積ませてくれましたし。走行時間がたぶん、1年目のセカンドドライバーの中ではいちばん多いと思うんですよ。そういう環境を今年も昨年も用意してもらえているというのが、すごく大きいかな、と」

—その環境を生かし、SUGOのレース（第5戦）で3番手を走っていたというのは、ものすごく大きい経験だったでしょうし、抜かれてしまいましたか、あのレースが今年一番、……。

石浦選手「そうですね。あれとセパン。両方4位なんですけど、ちょっと展開としては全然違って。まずルーキーにとっては、あのポジションでレースするのは自信になると、もちろんSUGOで抜かれちゃったのは、ものすごく悔しかったんですけど、もうちょっとできることはあったんじゃないかな、って。ただ、気持ち的に変わったのは、ちゃんとレースができるという自信がつけられたし、相手が誰だろうと気持ちで負けていることはなかったんで。『これなら、抑えてやる』という気持ちで走っていたから、精神的に負けて抜かれちゃったわけではないので、それは後のレースにも影響していますね」

—表彰台まであと一步。だいぶビジョンが見えてきたんじゃないですか？

石浦選手「抜かれちゃったけれど、SUGOでは立川（祐路）さんに技を学ばせてもらったので、これを応用していきたいですし、残りのレースのどこかで武土さんと一緒に表彰台に上りたいと思っています。それとタイムを出すべき時に、きっちり出せるようなドライバーとして、早く評価されたいですね！」

